「まだふみもみず」考
――小式部内侍「大江山」歌説話教材の要点――

安　道　百合子

はじめに

小式部内侍の和歌「大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立」の詠出状況を伝える説話は、高等学校古文の定番教材である。歌合の歌人に選ばれた小式部に対して、母和泉式部への使いは帰って来たかとたわぶれた定頼に対し、即座に技巧を駆使した和歌で応じ、歌詠みとしての評判が高まったというこの説話は、古文の入門期に、説話の面白さを味わうとともに和歌の修辞の学習ができる教材として選ばれているのであろう。しかし、このとき小式部は何歳くらいか、定頼のたわぶれはどういう性質のものか、二人の関係はどういったものだったか、といった条件によっては、高校生がこの説話から受ける印象には案外と幅があるようにも思われる。また、小式部の歌は、『百人一首』にも選ばれており、歌枕と掛詞を駆使した即興の和歌として、評価が定まっているように思われるが、そもそもこの歌のうまさはどこにあったのか。そして第四句、「まだふみもみず」は、初出「ふみもまだみず」とどう異なるのか。説話に組み込まれることで定まる読みというものがありはしないか。小式部の「大江山」詠を伝える資料を再読するとともに、説話教材としての要点を考察したい。

一、教科書採録の現状と二種出典の違いについて

この説話は、実は教科書によって、出典が異なっている。『十訓抄』を出典とするものと、『古今著聞集』を出典とするものとがあり、また採録部分にも若干の異なりがあるのである。同一説話もしくは類似説話が複数の説話集に伝わるのは決して珍しいことではないが、教科書には、当該出典についての解説がある一方で、他方の出典への言及はない。[1] また、たとえば第一学習社『古典古文編』が、『古今著聞集』「大江山」と『十訓抄』の「行成と

実方」と題する説話を並べるように、同一単元内に、本教材と、もう一方の出典からの別説話とを並べて採録するということもあるようである。本来、説話とその出典との間には、説話集として編纂するときの意識が関わっているはずであるから、教科書によって出典が異なるというのはやや面白い現象であり、そうした意味でも、本教材には、授業の広がりの可能性が見えるように思われる。

まずは、教科書ごとに、出典と教材の題名を示しておきたい。

① 東京書籍『精選古典』平成17年（平15検）
『十訓抄』「小式部内侍が大江山の歌のこと」

② 大修館書店『精選古典　改訂版』平成21年（平19検）
『十訓抄』「大江山いくのの道」

③ 明治書院『高校生の古典』平成20年（平19検）
『十訓抄』「大江山」

④ 第一学習社『標準古典』『古典　古文編』平成20年（平19検）
『古今著聞集』「大江山」

⑤ 教育出版『新版古典』平成21年（平19検）
『古今著聞集』「小式部の内侍」

また、二種出典の本文を確認しておこう。

『古今著聞集』〈橘成季編　説話集　1254成立〉
（巻五和歌　一八三小式部内侍が大江山の歌の事）

和泉式部、保昌が妻にて丹後にくだりける程に、京に歌合ありけるに、小式部内侍歌よみにとられてよみけるを、定頼の中納言、たはぶれに小式部内侍に、「丹後へつかはしける人はまいりにたるや」[2]といひ入て、局のまへをすぎられけるを、小式部内侍御簾よりなかばいでゝ、直衣の袖をひかへて、

おほえ山いくのゝ道の遠ければまだふみもみずあまのはしだて

とよみかけゝり。思はずにあさましくて、「こはいかに」とばかりいひて、返しにも及ばず、袖をひきはなちてにげられにけり。小式部、これより歌よみの世おぼえいできにけり。

（『日本古典文学大系』[3]）

『十訓抄』〈説話集　1252成立〉
（第三　人倫を侮らざる事）

和泉式部、保昌が妻にて、丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、歌よみにとられて、よみけるを、定頼中納言たはぶれて、小式部内侍ありけるに、「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなくおぼすらむ」といひて、局の前を過ぎられけるを、御簾よりなからばかり出でて、わづかに直衣の袖をひかへて、

大江山いくのの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

とよみかけけり。思はずに、あさましくて、「こはいかに。かかるやうやはある」とばかりいひて、返歌にも及ばず、袖を引き放ちて、逃げられけり。

小式部、これより歌よみの世におぼえいできにけり。

これはうちまかせての理運のことなれども、かの卿の心には、これほどの歌、ただいま、よみ出すべし、とは知られざりけるにや。

（『新日本古典文学全集』）

なお、教科書採録の本文には、出典にある説話題や巻名・配列に関する情報は含まれない。また、『十訓抄』から採録した①～③教科書のうち①は末尾三行「これはうちまかせての～知られざりけるにや」を省略している。

さて、この二つの説話は非常によく似ている。和泉式部が保昌の妻として丹後に下っていた間に、都の歌合に小式部が選ばれ、定頼がたわぶれて「丹後への使いは帰ってきましたか」と問うたところ、小式部は定頼の直衣の袖をつかんで即座に歌を詠みかけ、定頼は返歌もできず袖をひき離して逃げた、という展開はまったく同じで、表現もほとんど同じである。しかし、よく読み比べてみると、とくに定頼の描き方に違いがあることが確認できる。『十訓抄』の定頼の言葉は、「いかに心もとなくおぼすらむ」が加わり、歌を聞いたあとには「かかるやうやはある」と一層意外性への驚きが強い表現になっている。さらに、『十訓抄』の末尾三行には、定頼には、小式部がこれほどの歌を即座に詠むことができようとは予想できなかったのだろうかという語り手の感想が加わり、巻三「人倫を侮らざる事」（人をみくびってはならないこと）という教訓を導き出すための説話であることが明らかである。すなわち、小式部の歌人としての評判が高まった説話であるという点は共通するものの、『古今著聞集』は和歌にちなむ説話を集めた巻の歌徳説話の一として選ばれているのに対し、『十訓抄』のほうでは、小式部を侮った定頼をいましめる文脈に即して描かれているわけである。逆にいえば、末尾三行を省略した①社の教科書では、『古今著聞集』とほぼ同内容の読み取りが期待されているとも言える。

出典にさかのぼれば、こうした違いが読み取れるのだが、一方で教材としての扱い方には大きな違いはないようにも思われる。学習の手引きにはそれぞれ次のような問いがならぶ。

① 定頼中納言の「丹後へ遣はしける人は参りたりや」という言葉には、どのような「たはぶれ」の心が込められているか。小式部内侍は、大江山の歌で定頼中納言に対してどのようなことを言おうとしたのか。

② 「大江山」の歌について、この歌はどういうことを言っているのか、考えてみよう。この歌に用いられている掛詞について説明してみよう。「返歌にも及ばず、…逃げられけ

り」とあるが、なぜそうしたのか、その理由について話し合ってみよう。

③ 定頼中納言の「丹後へ…」の発言は何を言おうとしているのか、また小式部内侍はどのようなことを伝えようとして、「大江山…」の歌を作ったのか、それぞれまとめてみよう。「返歌にも及ばず」の部分からは定頼中納言のどのような様子がうかがわれるか、話し合ってみよう。

④ 「大江山」の歌は、定頼の言葉にどのように答えたことになるのか、考えてみよう。定頼が「『こはいかに』とばかり言ひて、…逃げ」たのはなぜか、説明してみよう。

⑤ 「丹後へ…」とは、具体的にはどういうことをいうのか。「思はずにあさましくて」とは誰のどのような気持ちをいうのか。

以上の学習の手引きを参照するに、この教材理解の眼目は次の三点にまとめられよう。Ⅰ定頼の「たはぶれ」の意図の理解、Ⅱ「大江山」詠が答えとなっていることの理解ならびにこの歌が即興の歌としてすぐれたものであったことの理解、Ⅲ定頼が逃げた理由の理解、である。そして、それぞれⅠ小式部は歌人として著名な和泉式部の娘であり、母の代作を頼んでいるのではないかと疑いをかけられていたこと、Ⅱ「まだふみもみず」には「踏み」「文」が掛けられており、丹後の地へまだ行ったことがないという意味とともに、母からの手紙を受け取っていないと答えたことになること、Ⅲからかったことがはずかしくなるほど即座に歌が返されたから、などが、ひとまず基本的理解として求められていると考えられよう。

しかし、このような教材理解の眼目は、小式部と定頼の関係がどのようなものであったかをぬきにしては実はかなり難しいものといえるのではなかろうか。とくにⅢ定頼が逃げた理由については、出典によって、全く異なった事情を伝えている。

二、定頼は悪役か

この歌の初出は『俊頼髄脳』である。少し長いが引用する。

『俊頼髄脳』〈源俊頼・歌学書 1112 頃〉

歌の、八の病の中に、後悔の病といふやまひあり。歌、すみやかに詠み出だして、人にも語り、書きても出だして、後に、よきことば、節を思ひよりて、かくいはでなど思ひて、悔いねたがるをいふなり。さればなほ、歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。いまだ、昔より、とく詠めるにかしこき事なし。されば、貫之などは、歌ひとつを、十日二十日などにこそ詠みけれ。しかはあれど、折にしたがひ、事にぞよるべき。

大江山生野のさとの遠ければふみもまだ見ずあまの橋立

これは、小式部の内侍といへる人の歌なり。ことの起り

は、小式部の内侍は、和泉式部がむすめなり。親の式部が、保昌が妻にて、丹後に下りたりける程に、都に、歌合のありけるに、小式部の内侍、歌よみにとられて詠みける程、四条中納言定頼といへるは、四条大納言公任の子なり。その人の、たはぶれて、小式部の内侍のありけるに、「丹後へつかはしけむ人は、帰りまうで来にけむや。いかに心もとなくおぼすらむ」と、ねたがらせむと申しかけて、立ちければ、内侍、御簾よりなから出でて、わづかに、直衣の袖をひかへて、この歌を詠みかけければ、いかにかかるやうはあると、ついゐて、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、え思ひ得ざりければ、ひきはり逃げにけり。これを思へば、心疾く詠めるもめでたし。（『古典文学全集』小学館）

『俊頼髄脳』でまず注目すべきは、歌の後悔の病を述べた文脈の延長に小式部の歌の例示があることである。歌を詠むには、急ぐべきでない。急いで詠んでいいことはない、貫之などは一首に十日二十日と時間をかけた、と述べたあとに、その反証として小式部が持ち出されるのである。つまり、一般的には歌は時間をかけて推敲するのがよいが、逆の例として小式部の場合がある、というわけで、小式部詠は急いで詠んだにもかかわらずすばらしい出来だった稀有の例ということになろう。歌の後に事情が書かれ、教材の説話との大きな違いは「ついゐて、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、え思ひ得ざりければ」と、定頼の逃げる前の行動が示されていることである。定頼の行動は、返歌をしようと考えたのだが「急ぐまじき」という一般論にしたがって、下手な返歌をすることなく逃げたと理解することもできよう。

いまひとつ、この説話で注目されるのは、定頼という人物に関して「公任の子」と紹介していることである。そもそも小式部が和泉式部の子であるからこのようなからかいが成り立つわけだが、それを言いかけたのがやはり有名な公任の子であるという説明が入ると、ともに著名な親を持つ二世同士という関係が浮かび上がり、定頼には、二世の苦しい立場を共感しうる人物という側面が見えてくる。「たはぶれ」について、「定頼には内侍を困らせようとする悪意があったわけではない。[4]」というような解釈が生まれるのもここに一因がある。

この定頼の行為の解釈については、やや下る『袋草子』〈藤原清輔 1159 以前〉の説話に至ると、より定頼の行為を正当化したものとして語られることになる。「一、白紙を置く作法」のなかに収められている。「題目ならびに位署ばかりを書きて、諸人の歌置きたるの後にこれを置きて、逐電して講席の座に居らずと云々。達者といへども、時に臨みて古今にかくの如き事あり。」ではじまり、要するに歌をその場では詠まず白紙提出してその場を去る、という場合が達人であってもあったというのである。そのあと、宇多帝の御幸の記録から名だたる歌人が歌を詠まなかっ

た話や、藤原泰憲が歌を書かずに退出した話を伝える。さらにそのあとに、小式部の歌がある。

歌合有るの比、長元か、小式部内侍歌人に入るの時、母泉式部、保昌の妻となりて丹後国に在り。定頼卿、小式部内侍の局に立ち寄りて戯れ云ふ。「いかに、丹後へ人は遣はし候や、いまだ帰り参らざるか」と云ひて起つ時に、式部直衣の袖を取りて云はく、

大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

定頼ひきやり逃げしと云々。　（『新日本古典文学大系』）

ここには小式部の即詠の才を褒める文言すらない。明らかに、歌が詠めないときに、下手な歌を詠むよりは、白紙を置くほうがよいという文脈であり、定頼が逃げたのは、むしろ歌の作法に従った褒められるべき行為と読めるのである。

以上のことを整理すると、教科書採録の説話においては、定頼の行動は、小式部をからかったことを恥じて逃げ出したという理解を求められているのに対し、先行する歌学書の類に引用されるときには、その理解の限りではない。むしろ故実の実践をしたと評価される場合もあったということである。[5]

三、小式部の年齢と定頼との関係について

では、定頼と小式部との関係はどのようなものだったと考えられるだろうか。

まず、この話がいつのできごとであるか、という点について確認したい。「和泉式部、保昌が妻にて丹後に下」っていたとき、というならば、すでに先行論において明らかにされている。和泉式部と保昌が結婚した時期については、定めがたいが、保昌が丹後守に在任していた時期ならば、史実が特定できるからである。『国司補任』には以下のように整理されている。[6]

寛仁四年(1020)　藤原経教　寛仁中任丹後守（大日本史）
治安元年(1021)
治安二年(1022)　前司源経相　正月廿日功過（小右記）
治安三年(1023)（守）藤原保昌　正月廿三日見（小右記）
＊国司と見える
万寿元年(1024)　守　源親方　十一月十八日見、十二月十三日見（小右記）

『小右記』治安二年正月廿日条には源経相の名が見える。受領功過定は任務の成果を問うものであるから、この前年まで源経相が丹後守を務めていたということになる。翌年には、保昌の名が国司として見えるから、保昌は経相の後任として治安二年春から万寿元年の秋くらいまで丹後守を務めたのであろう。

定頼は、長徳元（995）年生まれなので、このとき二十七～二十九歳くらいのことになる。治安二年には従三位で右大弁の官職を務め、翌年には左大弁にと順調に昇進をとげている。また治安元年には既に歌人として名を得ていたようでもある。[7] ちなみに父

親の公任が官を辞し出家したのは万寿元年のことである。

一方の小式部については生年は不明だがおよそ1000年前後とされる。[8] 1016年には藤原教通の子静円を生み、万寿二（1025）年には藤原公成の子頼仁を生んで他界しており、享年は二十代半ばと推定される。従って母和泉式部が丹後に下っていた時期には、概ね二十代前半ということになる。母とともに出仕したのはおそらく十代のはじめであろうから、女房としての経験も、恋の遍歴もそれなりに重ねた後ということになろう。実は定頼との関係も、「かなり親密な間柄だったのではないか」[9]と考えられている。『俊頼髄脳』には、定頼から小式部への贈歌として「人の心のほどをみるかな」が存し、『定頼集』にも「こちこてふことをきかばや」と小式部宛の誘いを請う歌が残る。また、『宇治拾遺物語』には、小式部、定頼、教通の三角関係を伝える説話が伝えられる。[10]

さて、この間に都で歌合が開催された事実があったか、ということになると、確認できる歌合はない。したがって萩谷朴氏は、小式部卒去以前で、保昌丹後在任期間を根拠として、寛仁三・四年、治安一・二・三年の間を時期として定めたうえで、「その間において、小式部内侍が作品の提出を要求され、それが、定頼の関心を惹くほどに重大な歌合、即ち内裏歌合か太皇太后宮歌合かと思われる晴儀の歌合が催された事実を伝える他の文献は全く見当らない。」と述べた。さらに、「或は、…略〔和泉式部集引用―引用者注〕…和泉式部が京に残した先夫道貞の娘小式部内侍のことを心にかけている事実と、…略〔定頼集引用―引用者注〕…定頼が和泉式部の決断に迷っているのを調戯った事実とを、からみあわせて虚構した架空の説話であるかも知れない。」という推論を述べられたのである。[11] この説話が虚構であると考える先行論は少なくない。[12]『定頼集』（I出光美術館蔵本72）には、定頼が、丹後下向をためらう和泉式部に対して詠みかけた歌「ゆきゆかずきかまほしきをいづかたにふみさだむらんあしうらの山」があり、ここに「ふみ」と、小式部詠と同じ表現があることが、無関係とは思われないからである。

確かに、実際の小式部と定頼の年齢を考えると、この説話から受ける印象との齟齬を感じるのは否めない。小式部の年齢が二十代前半であるなら、母の代作を頼むような疑いをかけられるとは思えないし、また定頼がある程度名の知れた歌人であるなら、二世という共通項をもってしてもこの戯れはやや子供じみているようにも見える。

そしてまた、『百人一首』歌の注釈などには、このときの小式部の年齢を十代と推定する説がまま見受けられるのである。山中裕氏「このとき小式部は十二―三歳であったと推定されている」。安東次男氏「作者の年齢は十五歳ごろではなかったかと思われる」。高橋睦郎氏「この時、小式部は十四、五歳か」[13]など。

ここで考えてみたいのは、果たして説話において、史実に基づ

いての読み取りがどの程度期待されているのだろうか、ということである。

既に確認したとおり、本歌は初出『俊頼髄脳』の時点から、詠歌状況とともに伝えられたが、『十訓抄』に至っては、教訓という側面が強くなっていた。菅原利晃氏は、小式部内侍の和歌説話の「歌徳」即ち「証」としての側面は、時代が下がるにつれ、強くなったことを確認したうえで、「偉大な母を持つがゆえに比較され疑いをもたれる少女像、夭折故の悲劇のヒロイン像のようなものが、次第に膨らんできたのではないだろうか。その転機が『十訓抄』の教訓的意味付けといえよう。」と述べられた。[14]

説話本文に、和泉式部が丹後に下っていたころという史実に基づいた文言がある以上、このとき小式部は十代だとは断言しにくい。しかし、これら教材となっている説話の時代において、想定している小式部の年齢というのは、やはり十二、三歳であると思うのである。それは、宮仕え間もないころ、著名な母を持つ娘として好奇の目にさらされるころであり、たとえうまい歌を詠んだとしても母の代作ではないかと疑いをかけられるような年齢である。それにはやはり、少女でなければならないと思うのである。そして、そんな少女であるからこそ、定頼のおどろきが際立つのであり、彼女の歌が確かに母の代作でないことを証明するためには、母不在の状況設定が不可欠だったと思われる。

それは虚構であるか否かという問題とは別に、説話として成り立つための諸条件が選ばれているのだと言い換えてもよい。

四、和歌の修辞と「まだふみもみず」

さて、では小式部の一首の歌としての出来はどうであろう。「大江山」詠を伝える書物は実に多い。『袋草子』はやや例外的であったが、他書は、概ね小式部の速詠もしくはその場に応じての適切な詠歌という点を認めることに大きな揺らぎはないようである。俊頼が撰集した『金葉集』にも、詞書に詠歌状況が示されている。ここには定頼の反応はない。

和泉式部保昌に具して丹後にはべりけるころ、みやこの歌合侍りけるに、小式部内侍うたよみにとられて侍りけるを定頼卿つぼねのかたにまうできて、歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人はつかはしてけんや、つかひまうでこずや、いかに心もとなくおぼすらんなど、たはぶれてたちけるをひきとどめてよめる　小式部内侍

550 おほえやまいくののみちのとほければふみもまだみずあまのはしだて

（『金葉和歌集』二度本巻九雑上）

「大江山」詠が現在ほど有名になったのは、定家の『百人一首』に採られたことが大きい理由だろうが、それに先立つ『八代集秀逸』『百人秀歌』にも選ばれており、定家が秀歌として認めていたことが知られる。しかも、定家がこの詠歌状況に注目していたらしいことは『定家八代抄』に詞書「和泉式部丹後国に侍りける

比、中納言定頼文やありつると尋ね侍りければ」を伴って入れていることや、『顕註密勘』に「時のおぼえ人のさま、さこそは侍りけめ」とあることから窺える。また、『袋草子』以後、『十訓抄』以前ということでは、『無名草子』の女性評にも、小式部についての記述が見出せる。教通に愛され子をなしたこと、瀕死の床で「いかにせむいくべきかたも思ほえず親に先立つ道を知らねば」と詠んだことにより助かった話（『古今著聞集』採録説話）を紹介したあとに「大江山」歌を「折につけてめでたかるべし」と評する。総じてこの和歌については、歌そのものよりも詠歌事情に強い関心が寄せられていたのである。

『百人一首』を含めると、多数の注釈書があるが、一首の理解や評価に目立った異見はない。早く石田吉貞氏が「歌そのものから言えば、怜悧や才気の歌で、一般の人にはそのうまさがわかり易く、有名になり易い性質のものではあるが、真の意味では、それほどのものではないと言ってよい。」と評したように[15]、一首の和歌よりも、宮仕えサロンでの機知のあるやりとりに注目されてきた。島津忠夫氏「当意即妙の才気に満ちた歌」、鈴木日出男氏「「いく野」「ふみもみず」の掛詞を駆使し、丹後国の歌枕をみごとに並べたてた一首の確かさ」、谷知子氏「掛詞を組み合わせた地名を駆使した、当意即妙の機知にあふれた歌」など[16]に、要点は尽きるが、一方で、近年では、その和歌表現や歌枕の機能にも研究の目が注がれている。

大江山の場所については、しばしば議論され、現在は国境の大江山ということでほぼ定説化している[17]。

藍美喜子氏は、歌枕大江山の史的変遷をたどられたうえで、「平安期に入ると大枝とも表記され「なげきのみ大江の山」（みつね集）、「大枝山嘆きこらする人」（資賢集）のように両用の「江・枝」が用いられ、「嘆き（木）と大（多）江（枝）」の縁語・掛詞が音の縁によって仕組まれ、あるいは「嘆き」が「憂き」に変わって、「憂きことを大江の山と知りながらいとど深くも入るわが身かな」（藤原隆家）のごとく定式化されていったのである。これは木材を多く産する地名の名残を留めていると見てよいであろう。それに対し、従来の連想を断ち切ったのが小式部内侍歌である。」とされ、「気分としては、都から丹後などへ下向する哀愁を揺曳させてきた大江山という地名の伝統を継承しつつも、一転「大江山—生野」という新しい地縁を結び、さらに名勝天の橋立を加えて計三か所の地名を畳み込んでゆく道行文的手法を編み出した点に趣向の目新しさがあったのである。」と論じられた[18]。

また小山順子氏は、やはり歌枕行野について「「生野」の音から「行く野」が旅路を意味し、「幾野」が遥かに続く野を意味するという、二重の連想が音によって喚起された」と述べ、「「大江山を越えて行く数多くの幾つもの野」と解されていたという享受の可能性」を提起された。さらに、初出と『金葉集』以後の本文異同についても「「行野」が単に、京から天橋立へと到る際に通

過する「点」を意味するに過ぎない歌枕であるなら、「行野の里の」でも構わない。しかし、天橋立までの長く遠い道のりを「行野」が象徴するとすれば、「線」を連想させる「行野の道の」である方が、より適切であり、また自然であると受け止められたためと考えられる」と論じられた。[19]

また、「天橋立」についても、武田早苗氏が、彰子サロンで詠まれていたことを根拠に、歌枕として決して定着していたわけではない意識的に選ばれた歌枕であることを実証された。[20] いずれも首肯される論であり、地名を並べたというだけではすまされない小式部の歌の境地を論証されたものである。

ところで、『俊頼髄脳』に紹介され、『金葉集』に入集した歌の第四句は「ふみもまだみず」であった。現在、人口に膾炙している「まだふみもみず」ではない。この句の違いはどう理解するとよいのだろうか。

「まだふみもみず」になったのは、おそらく定家の『八代抄』以後である。その詞書には「和泉式部丹後国に侍りける比、中納言定頼文やありつると尋ね侍りければ」とある。思い起こしたいのは、説話の伝承において、定頼のたわぶれに「文」という言葉はなかったということである。あくまで「丹後に使わした人は返ってきましたか」という問いかけであった。しかし、教科書教材において、かならずこの問いかけは、代作を頼んだその返事はありましたか、と意訳もしくは解説が加えられ、結果として「まだふみもみず」は、「まだ手紙を見ていません」と「まだ天の橋立を踏み見ていません」の掛詞であると解説されるのである。では、そもそも「踏み」と「文」の掛詞というのは、すぐに両方を想起できるような掛詞なのだろうか。

和歌だけを一首として読むと、「橋」がある以上「踏み」の意味は自然に理解されるが、「文」の連想はむしろ難しいのではなかろうか。「文」と「踏み」の掛詞は『古今集』には用例がない。『後撰集』には二首「ふみみ」用例があるが、いずれも詞書に「ふみ」の言葉がある。「をとこの女のふみかくしけるを見て、もとのめのかきつけ侍りける／四条御息所女／1122 へだてける人の心のうきはしをあやふきまでもふみみつるかな」「女のもとにふみつかはしけるを、返事もせずして、のちのちはふみを見もせでとりなむおくと、人のつげければ／よみ人しらず／1222 おほぞらに行きかふ鳥の雲ぢをぞ人のふみみぬ物といふなる」。また、「ふみそむ」の一例も恋文を初めて贈る意が明らかである。「人を思ひかけてつかはしける／平定文／695 はま千鳥たのむをしれどふみそむるあとうちけつな我をこす浪」。

すなわち、明らかに掛詞であることが理解される場合は、詞書に「文」の言葉があるとき、もしくは恋文の連想が生じるような状況が説明されているときに限られるといってよい。そうすると、「大江山」歌の場合もここに「文」が掛けられているとの理解には、詠歌状況の説明を伴った伝承であったことの意味が大き

いということになる。

初出および『金葉集』では「ふみもまだみず」であった。歌は声に出されて初句から順に耳にはいる。「ふみもまだみず」というときにはまず「手紙もまだ見ていない」の意味が前面にあらわれる。定頼の問いに答えるという状況説明を伴って、その答え「手紙もまだ見ておりません」という意味が先にくる。ところが、「まだふみもみず」になると、「踏みみる」の連続性が「まだ」にさえぎられないため、手紙の意味が二次的なものに後退し、まだ踏んでみたことがない、つまり丹後の国までの道のり、さらには天の橋立てにまだ行ったことがありませんという「踏み」の意味が強くなってくると考えられる。

要するに、「文」掛詞の想起には、定頼のたはぶれの内実に「文」の意を認めるか否かにかかるところが大きいわけで、それをはっきり示したのが、定家の『八代抄』詞書であったと思われるのである。「文」が掛けられていることがはっきりわかれば、歌の表の意味としては、三つの地名を道行き的に並べ、「踏み」を前面に出したうえで、問いへの答えはしのばせるほうが一首の出来栄えとしてよいと判断されたのではなかろうか。

おわりに

古典教材のおもしろさを味わうには、当然のことながら、時代状況の異なりを理解する必要がある。説話教材においてもそれは基本的に変わらないだろう。実在の人物であるならばなおさら、史実に基づいた考証も有用である。しかし、である。

小式部と定頼の関係によって、本説話の理解には案外と幅があるのではないか、と最初に述べたが、説話というのは、そういう幅が生んだ結果だと思うのである。多くの人の興味があり、人物の実人生のある部分に強烈に興味が集中した結果、ある意味ではそこだけが大げさに表現されて伝えられる。そもそも説話が生まれるというのはそういうことなのではないだろうか。だからこそ、説話教材の読みに事実の確認は必要な一方で、どういう理解が面白さを生んだかという視点が欠かせないとも思うのである。この場合は、小式部の年齢が実際は二十歳を超えていただろう時期の設定であるが、おそらく十代前半の少女としての読み取りを期待されているということ、当初の答えが「ふみもまだみず」だったとしても、歌の出来栄えを優先して「まだふみもみず」と伝えられたこと、そして実際は二人はかなり親しい仲で場合によってはこの説話そのものが架空の話である可能性が十分あるとしても、歌人定頼をまだ年端もいかない少女が言い負かしたとするほうがおもしろいのである。恋の噂が絶えない和泉式部の娘が、母のスキャンダルをものともせず歌人としてさらりと醜聞をかわすというこの小気味の良さ。それは、小式部の和歌の多くが説話的詠歌状況を伴って伝えられていることと決して無関係ではない。キャラクターの対照性を利用した話の面白さを生み出す仕

掛けというべきものがここにはあるのであろう。

注

（1）　ただし、第一学習社は板本『十訓抄』挿絵を載せ、教育出版は『百人一首画帖』小式部「大江山」詠を書き入れた画像を載せている。いずれも、意図的意識的に他出典を示していると考えられる。

（2）　「参りにたるや」は、「参りにたりや」にしている場合がある。中世らしい変化のためであろう。

（3）　『古今著聞集』本文は岩波書店日本古典文学大系本より、『十訓抄』本文は小学館新編日本古典文学全集本より引用した。また、このあと引用する『俊頼髄脳』は小学館日本古典文学全集本より、『袋草子』は岩波書店新日本古典文学大系本より引用した。『金葉集』『後撰集』『定頼集』など和歌の引用は新編国歌大観による。

（4）　高橋貢氏「鑑賞　説話文学―小式部内侍「大江山いくのの道の遠ければ」歌をめぐって―」（『並木の里』第56号　2002）。なお定頼が公任の子であることは、①②④⑤教科書では脚注に指摘してある。

（5）　古瀬雅義氏「小式部内侍「大江山」歌説話で語られるもの―視点のずれによる藤原定頼の役割の変化―」（『国語国文論集』第25号　安田女子大学日本文学会1995）は、複数出典が伝える詠歌状況の異なりについて、定頼の役割に注目され「からかった言葉の内容や返歌できずに袖を引き放して逃げたという行動から、道化的な役割を読み取るか、故実の実践を読み取るか少なくとも二様の解釈が導き出されている。」と述べられた。また、菅原利晃氏「小式部内侍「大江山」歌説話における教訓―「即詠」と「証」としての歌徳説話―」（『札幌国語研究』2002）は『俊頼髄脳』『袋草子』『十訓抄』の三書について、教訓説話としての違いを論証されている。

（6）　宮崎康充氏編『国司補任』（続群書類従完成会）。＊を付した部分は編者の注記。なお原出典『大日本史』『小右記』の当該記事も確認したところ、源経相の功過記事は治安元年正月廿日の記事に見える（大日本古記録『小右記』）。保昌の丹後守在任の期間が一年前からだとしても大筋で論旨に影響しない。

（7）　定頼については柏木由夫氏「藤原定頼年譜考」（『平安時代後期和歌論』風間書房2000所収）に詳しい。前掲（5）古瀬氏は「この「大江山」をめぐる和歌の逸話で、返歌できずに逃げ帰ったという定頼は、実はかなりの力量を持つ青年歌人であり、文人貴族の道を歩んでいた貴公子だったのである。この一連の説話では、小式部内侍の即詠の才に視点を向けたものが多かったが、それを強調するためには、この時返歌できなかった定頼も歌人として秀でた才を持っていた人物でなくてはなるまい。」と述べられた。

（8）　小式部の生年については、山中裕氏997年説、上村悦子氏999年説、森本元子氏1000年説、鈴木一雄氏1001年以前説がある。

（9）　前掲（7）柏木氏論文。

（10）　『俊頼髄脳』「垣ごしに馬を牛とはいはねども人の心のほどをみるかな」。『定頼集』（Ⅱ尊経閣文庫蔵本10）「こちこてふこと

をきかばやとこ夏の匂ひことなるあたりにもゐん」。『宇治拾遺物語』三五小式部内侍、定頼卿ノ経ニメデタル事。

(11) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』(増補新訂第二巻 同朋舎 1995)「一一八(寛仁末治安頃)或所歌合考証」による。

(12) 三木紀人氏「亜流の世代のアイドル—小式部」(『国文学』20巻16号 1975)「定頼は、打てばひびくような小式部の応酬を充分予期して、人々の陰口を利用してあえて引き立て役を買って出たということにもなってくる」。吉海直人氏『百人一首の新考察』(世界思想社 1993)「ひょっとするとこの事件はもともと事実なのではなく、定頼と小式部の仕組んだでっちあげという可能性もある」。高橋貢氏前掲(4)論文「俊頼周辺の人々の中で右のような話題(後悔の病という歌病)での話があって、その中で作られた、あるいは提供された歌と話でなかったのか」など、架空の説話であるとされる論は多い。

(13) 山中裕氏『人物叢書 和泉式部』(吉川弘文館 1989)。安東次男氏『百人一首』(新潮社 1976)。高橋睦郎氏『百人一首 恋する宮廷』(中公新書 2003)。

(14) 前掲(5)菅原氏論文による。

(15) 石田吉貞氏『鑑賞百人一首』(淡交社 1971)

(16) 島津忠夫氏『新版百人一首』(角川ソフィア文庫 1973)。鈴木日出男氏『百人一首』(ちくま文庫 1990)。谷知子氏『ビギナーズクラシックス日本の古典百人一首(全)』(角川文庫 2010)。

(17) 糸井通浩氏「歌枕「大江山」考—小式部内侍の百人一首歌をめぐって—」(『京都教育大学国文学会誌』1985)

(18) 藍美喜子氏「掛詞と縁語—小式部内侍歌覚え書」(『小倉百人一首の言語空間—和歌表現史論の構想』世界思想社 1989 所収)

(19) 小山順子氏「小式部内侍「大江山生野の道の」考—歌枕の機能、解釈、享受—」(『京都大学国文学論叢』17号 2007)

(20) 武田早苗氏「小式部内侍「大江山」歌の背景」(『相模国文』30号 2003)